

『緋文字』におけるインディアンの痕跡

——インディアンとの和解思想——

常 光 健*

Synopsis

This paper focuses on finding a new interpretation of Indian representation in *The Scarlet Letter*. Few scholars have studied the Indian representation in this work. One of the few, however, is Sacvan Bercovitch, who finds wildness in Pearl and the image of a renovator in Hester Prynne. In recent years, the mainstream argument has been made by Renée Bergland that Hawthorne is a white supremacist who describes Indians as ghosts in his works. However, by analyzing the Indian representation in “The Customs House” and *The Scarlet Letter* in relation to the historical background of the early American colonies and Hawthorne’s ancestors, it is possible to argue that Hawthorne wanted to reconcile whites with Indians.

The historical facts that Hawthorne used in *The Scarlet Letter* are also mentioned in “Main Street,” which is arguably a criticism of the “manifest destiny.” It can be inferred that the same criticism underlies his view of history in *The Scarlet Letter*. And a “secret sin” offers new framework to interpret this work in addition to adultery which is the main thematic paradigm in this work. The “secret sin” indicates whites’ prosecution of Indians derived from European colonialism.

The main argument of this essay is that Arthur Dimmesdale and Hester are the expressions of the psychological conflict of the Puritans and their descendants regarding the “secret sin” in the 17th and 19th centuries, respectively. Arthur can be interpreted as a suffering minister between brutal colonialism and humanity, and as indicating Hawthorne’s reluctance to acknowledge the crimes committed by the Puritans including his ancestors against Indians, while Hester will be interpreted as expressing catholic sisters who could not protect Indians and progressive woman such as Margaret Fuller.

At the conclusion of this conflict, Author’s death and Hester’s survival as a good counselor mean that Hawthorne was not a white supremacist but was sympathetic to Indians and wanted reconciliation. He shows his pacifist regard toward Indians in this work.

目 次

はじめに

I 「税関」(“The Custom House”)におけるインディアンに関する記述

II ビューリタン社会における不倫

III 『緋文字』におけるインディアンの痕跡
おわりに

はじめに

* つねみつ たけし 文学研究科英文学専攻博
士課程後期課程
2021年10月4日 査読審査終了

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne)
の代表作とされる『緋文字』(*The Scarlet Letter*)

における主要テーマは、ピューリタン社会における律法上の罪とされる不倫 (adultery) である。牧師のアーサー・ディムズデール (Arthur Dimmesdale) は、その犯した罪と社会に対して告白しない罪にさいなまれ、最後にはその罪を認め死んでいく。他方夫を持ちながらアーサーと性的関係を持ったヘスター・プリン (Hester Prynne) は、罰である緋文字のAをまっとうしてピューリタン社会の中で、人々の非難の目にさらされながら生き続ける。ヘスターは健気に生き、ついにはコミュニティの信頼を勝ち得た。そしてヨーロッパから帰還し、もともと緋文字をつけた姿をピューリタン社会にはっきりと示すことで、19世紀において自立した女性のありさまを予表するのである。

これまで研究者は不倫をパラダイムとしてこの作品の研究を行っており、インディアン表象を研究する学者は多くなかった。しかし数少ないそのひとりであるサクヴァン・バーコビッチ (Sacvan Bercovitch) は、パール (Pearl) にインディアンのイメージと、ヘスターの革新性にインディアンの野生性を見出している。彼は、ジャクソニアン時代には、社会発展の初期段階として原始的様式に代わって文明が登場し、アメリカ社会は高い優位性を持つ白人文化と自然状態を結合した状態にあり、パールとヘスターのインディアン性は、そのようなアメリカ的自然を表したものであると主張する (Bercovitch 40)。しかし、バーコビッチはインディアン表象の意味を物語の展開に探っているわけではなかった。

1990年代以降では、レネ・バーグラント (Renée Bergland) が、アメリカ白人作家はインディアンの幽霊に憑りつかれていると論じた。バーグラントは、『緋文字』におけるインディアン表象をそのような亡霊の表象と解釈し、その意味を積極的に探っている。追放されたヘスターと社会との関係の中に、インディアン性を見出し、それを幽霊になぞらえたのである。そして、ホーソーンは『緋文字』を代表として、作品中に血に染まったイン

ディアンの遺産を核としたアメリカを構築したと論じる (Bergland 158)。『緋文字』においてインディアンを白人の登場人物に内在化させ、幽霊と見立てていると解釈することは妥当であるとしても、それをもってホーソーンを白人至上主義者とする主張は見直されるべきではないか。というのも『緋文字』においては、19世紀前半ではタブーとされているインディアン迫害の史実がほのめかされており、インディアンを迫害する白人をアレゴリカルに非難したと解釈できるからである。

ローラ・ドイル (Laura Doyle) は、『緋文字』においては暴力がテーマであり、白人がインディアンを迫害するアメリカの植民地化を「隠された罪」 (secret sin) として描き、インディアン性を帯びたヘスター、アーサー、ロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth) が、性的自由のために植民地を社会的な危険にさらしたと論じている (265)。ドイルは、「隠された罪」をインディアンに対する白人の犯罪として認識したのだが、その罪に対するホーソーンを論じることはない。むしろ論点を変えて、白人に憑依したインディアンの性的行動だけを非難するのだが、そのような議論は一貫性を欠くだろう。

本論では、以上のような研究の歴史に立脚しながら、さらに次のようなことを明らかにする。まず、『緋文字』においてはインディアン問題が隠されており、作品中の「隠された罪」とは17世紀以降のアメリカにおける (白人による) インディアン迫害であることを論証する。次いで、ホーソーンが、インディアンに対する罪を認めることでインディアンに対する罪意識の呪縛を解き、さらなる迫害を止め、和解しようとする思想を持っていたことを論じる。

I 「税関」 (“The Custom House”) におけるインディアンに関する記述

『緋文字』がインディアン問題を扱っているかどうかを見極めるために、まずその序文に位置

付けられるべき「税関」でジョナサン・ピュー (Jonathan Pue) が残したとされる事実 (“A portion of his [Jonathan Pue’s] facts”) にホーソーンの歴史認識が反映されているかどうかを論じたい。次に「税関」において、古い牧師館の周りで見つかるインディアンの矢じりと税関の2階で見つける文字Aの刺繍には、インディアンと緋文字の関係が暗示されており、『緋文字』本編でのインディアンの痕跡を示す予表であることを論証する。あわせてここでの歴史認識とは、未開のアメリカ大陸に白人が入植したという白人側からの見方ではなく、住んでいた土地に白人が侵略してきて土地を奪ったというアメリカ・インディアンからの見方であることも見ておきたい。

ホーソーンは、序文を兼ねた「税関」において、緋文字にまつわるヘスターのエピソードは、ピューが残したとされる事実に基づいたと述べている。同時にピューが残した資料は『緋文字』の1年前に出版した「大通り」(“Main Street”) を書くための準備にもなったと述べる (30)。ピューが記録を残したエピソードそのものがフィクションなので、これはホーソーン自身の創作による記録であり、いわば作り上げられた「事実」ということになる。その事実に基づく「大通り」の根底にある歴史認識は、マイケル・J・コラカーチオ (Michael J. Colacurcio) によれば、当時の支配的なイデオロギーである「明白な運命」(Manifest Destiny) を批判するものである (Colacurcio 40, 540)。「大通り」で表現されている歴史認識はホーソーンのものであり、『緋文字』においてもまた、インディアンの立場から白人を非難するような歴史認識が、その根底にあると推察するのが妥当であろう。

また、「税関」において、先祖であるジョン・ホーソーン (John Hathorne) に関し、「彼 [William Hathorne] の息子 [ジョン] も迫害の精神を受け継ぎ、魔女たちの殉教で目立ったので、彼らの血が彼に染み付いたと言ってもいいだろう」(9)と言及している。この描写は、『緋文字』の翌年に出

版された『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables*) においてマシュー・モール (Matthew Maule) を魔女裁判で処刑したピンチョン大佐 (Colonel Pyncheon) を想起させる。一般に『七破風の屋敷』は、白人労働者階級が抱く支配階級に対する恨みの物語と解釈されている。しかしモニカ・M・エルバート (Monica M. Elbert) は、この作品が白人によるインディアンの土地の違法な略奪を扱っていると指摘しており (Elbert 30)、最近の研究では、ホーソーンは白人によるインディアンに対する迫害を非難していたと論じる言説も見られるようになってきた。「明白な運命」を非難する「大通り」と、ピューリタンによるインディアンの土地の搾取を非難する『七破風の屋敷』の歴史認識の共通性が暗示されることから、同様の歴史認識で語られているであろう『緋文字』においては、白人によるインディアン迫害の問題が扱われている可能性が高いのである。

『緋文字』におけるインディアン問題の存在を示す次の手掛かりは、セーラムを主な舞台とする「税関」における古い牧師館周辺での出来事の記述にある。ホーソーンは、記憶された人物や古い習慣などを記述しただろう書類を税関の2階で見つけたとき、旧牧師館の周辺にかつて住んでいたであろうインディアンの矢じりを見つけたときと同じ喜びを感じたと述べている (28)。

1846年に出版された「古い牧師館」(“The Old Manse”) でホーソーンは、「古い牧師館は千のインディアンの小屋 (wigwams) よりもましなのだ」(Hawthorne, *Mosses from Old Manse* 11) と語り、消えたインディアンの住処と自ら住む牧師館とを比較している。インディアンよりも白人がアメリカの主としてふさわしいことを述べているものとして、ホーソーンが白人至上主義者であることのひとつの証拠としてよく引用される。しかし、注目される点は、この最後のセンテンスに行き着くまでに、滅びて姿の失われたインディアンに対する思いが、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー

(Henry David Thoreau) との話、遺留物の発見のエピソードなどを交えて滔々と語られているところである。そして、最後のセンテンスでホーソンは自らを納得させているように読める。

ここには、白人が来る前のある未知の時代に、その住民が大部分の物質を川から引き出していたに違いない、便利な場所にインディアンの村があった。その場所は、槍や矢じり、ノミ、その他の戦争や労働、追跡のための道具が鋤によって土の中から掘り起こされることによって特定される。あなたは、草の下に半分隠れている石の破片を見る。何の変哲もないものに見える。しかし、もしあなたにそれを拾うだけの確信があれば、見よ、この遺物を！ インディアンの残していったものを見つける不思議な能力を持つソローが、最初に私に探してくれた。その後、私はいくつかの非常に完璧な標本を手に入れて満足したが、それはまるで偶然が作り出したかのように、あまりにも無造作に作られていた。その大きな魅力は、この無骨さと、一つ一つの製品の個性にあり、一つのパターンに沿って全てを形作る文明的な機械製品とは大きく異なる。何世紀も前に落とされ、それ以来一度も扱われたことのない矢じりを自分の手で拾うことには、絶妙な喜びがある。つまり、獲物や敵を狙って矢を射ようとした赤色の狩猟者の手から直接受け取ることができるのだ。このような出来事は、インディアンの村とそれを取り囲む森を再び構築し、顔を塗った酋長や戦士、家事に勤しむ女たち、インディアン小屋の中で遊ぶ子供たちを生き生きと思い起こさせる。また、インディアンの幼児は木の枝で風に揺り動かされている。このような一瞬のビジョンの後に、現実の白昼に周囲を見渡すと、石堀、白い家、ジャガイモ畑、そしてシャツの袖と素朴なパンツロンを着てひたすら鋤を振るう男たちを見ることができるのは、喜びなのか苦しみなのか、

どちらとも言えない。しかし、これは馬鹿げている。古い牧師館は千のインディアン小屋よりもましなのだ。(10-11)

これは、古い牧師館の周りを見回したときに、かつて住んでいたインディアンが消滅し、その犠牲のもとに白人の居所があることを苦々しく思いながらも、現状を肯定せざるを得ない立場を述べたのであろう。また、貧困のために居所が決まらず、不安定な状態であることを嘲るように語ったものとも考えられる。ここでホーソンは自身をインディアンと比定しているわけで、だからこそ牧師館で拾ったインディアンの矢じりには深い思いが込められているのだ。矢じりが、滅ぼされていなくなってしまったインディアンにまつわる故事を明らかにしてくれる象徴のようである。

緋文字については、ホーソンは緋文字の刺繍を税関の2階で見つけたときに、インディアンの目に留まったかもしれない刺繍を胸に当て、熱い鉄のように燃え上がるのを感じたと言う(31-32)。緋文字が何か強烈に胸をうつようなヘスターの物語を象徴するものとして描写されている。また、本来ピューリタン社会の中で目立つべき緋文字がインディアンの目に留まるという描写は、緋文字に関してインディアンが関わっていることをほめかしている。本編においてもヘスターに対するピューリタン社会の評価が変化し、緋文字の意味が罰の印から善行の証に変わっていく頃、インディアンが緋文字に向けて矢(missile)を放ち、当たったのだが、害も無く落ちたという描写がある(163)。これらのことから、緋文字とインディアンとの密接な関係が暗示されていると言えよう。

ここで「税関」に戻ると、『緋文字』における矢じりの意義についてドイルは、緋文字とインディアンの矢じりが物語の予表として機能する可能性があることを指摘している。

この美しい赤い文字は、「たまたま私の胸に置い

た、インディアンの目を引くために白人が考案した装飾品のひとつ」としてホーソーンを感動させたものだった。——この並列「緋文字は白人が考案し、インディアンが注目する」は、先に述べたインディアンの矢じりの暗示と相まって、「野生の」白人入植者ヘスター（その自由な精神は、繰り返しアメリカ・インディアンのそれに比されることになる）の物語への最大限の取り込みを予感させる。(258)

ドイルは「税関」におけるインディアン表象に注目し、本編におけるヘスターがインディアン性を物語の中で発揮すると論じている。そのインディアン性は自由な精神を示し、ポジティブな意味合いと解釈されている。しかし、ドイルは先に述べた矢じりに込められたホーソーンの思いをくみ取ることにはしていない。

「税関」において緋文字と矢じりは関わりがあることがほのめかされ、なおかつ矢じりに込められたホーソーンのインディアンに対する思いがあることから、続く『緋文字』の本編では、緋文字は白人の不倫の物語を予表すると同時に白人がインディアンを迫害した罪を認めることの意味を問うもうひとつの物語の予表するものとして機能していると考えられる。

Ⅱ ピューリタン社会における不倫

『緋文字』における白人男性と白人女性の不倫の話では、登場人物にインディアン性を読み込んでも、男女の不倫というパラダイムの中に、男女の関係以上のものを見出すことは難しい。不倫がテーマであれば男女関係がテーマのひとつとなるのは自然であるが、白人のアーサーと夫のいるインディアン女性のヘスターが男女関係になったとしても、ふたりの不倫の行為を罪とする共通の社会規範が存在しない。登場人物にインディアン性を読み取って物語を解釈するために、不倫がピューリタン社会でどういった意味を持つ罪なのか、そ

してなぜホーソーンは不倫を物語のパラダイムに設定したのか、なぜヘスターとアーサーのふたりが必要だったのかを検討する必要がある。

17世紀初頭のプリマスのピューリタン法では、不倫は刑法上の犯罪であった。ニューイングランドの聖職者たちは、未婚のカップル、男色、獣姦などと同じく不倫は、墮落した人類によって引き起こされる、神の意思に背く行為の具現化であると説明した (Godbeer 26)。その神とピューリタン社会に背くものとして、実際にニューイングランドで起きた不倫事件が『緋文字』の題材に選ばれたとよく指摘される。キャサリン・オストランダー (Kathleen Ostrander) は、1648年にメイン州で起きた不倫事件の判決によって、緋文字の刺繍を公衆の中では身につけるよう言い渡されたメリー・バカラー (Mary Bachiler) という女性が、ヘスターのモデルであると論じている (Ostrander 80)。しかし、ホーソーンは事件として起きた不倫を単純に題材に選んではない。というのも、17世紀初めのニューイングランドでは、酩酊、説教中の居眠りと未婚者のカップルの婚前交渉と同じくらいの罪として不倫を扱っていたし (Godbeer 64-65)、ただちに死刑になる男色や獣姦に比べると不倫は罪としては軽く扱われていたからである (McManus 116)。ピューリタン法において罪の重さを考えると、ピューリタン社会の批判を目的とするのなら不倫を取り上げるのはバランスが悪いのではないだろうか。罪の程度を問うとすれば、例えば殺人があるだろうし、性的な欲望に対することであれば、同性愛とか獣姦が神に対する罪として不倫より重い題材として十分だろう。ピューリタン社会に反抗する女性像を描き取れば、ジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) などの支配者と戦ったアン・ハッチソン (Anne Hutchinson) を題材として、不倫以外の宗教問題などでヘスターの姿を重ねれば、その意味合いはよりはっきりする。しかし、不倫を物語のパラダイムとしてあえて採用することで、多様なテーマを盛り込める

ことができたのだろう。

ただし、多様なテーマを盛り込むために不倫のパラダイムを採用したのだが、白人の不倫物語のパラダイムのままでは、『緋文字』におけるインディアンの痕跡を見つけることは難しい。そこで物語のパラダイムである不倫について研究者らの4つの考え方を検討し、インディアンの物語をどう読み取っていけるか探りたい。

第一は、不倫を厳密にピューリタン律法上の問題と位置付け、その行為のピューリタン社会における評価を物語の解釈の中心に置くパターンである。成田雅彦は、『緋文字』における主要モチーフであるヘスターとピューリタン社会との対立軸は、アメリカ小説のクリシェである意識と無意識、精神と肉体、頭と心といった対立軸を多面的に象徴しているとしながらも（成田 76）、不倫に関しては宗教と法律がほとんど一体となっているピューリタン社会の厳格さを中心に解釈する。ヘスターが自身の不倫に関して「それなりの神聖さ」があるという抗弁に関して、ピューリタン社会からの解釈を提示する。

ピューリタンの権力者たち、つまり、この社会の保守的な父性的権威から見る限り、ディムズデルとヘスターの犯した行為には、もちろん「それなりの神聖さ」などは認められない。それは、自分たちの社会の根幹をゆるがす危険な罪であり、徹底的に断罪されなければならない。「宗教と法律がほとんど同じ」（五〇）というこの社会の言説に従えば、それ〔不倫〕は、自分たちの社会の根幹をゆるがす危険な罪であり、徹底的に断罪されねばならない。「宗教と法律がほとんど同じ」というこの社会の言説に従えば、それはヘスターの胸のA、“Adultery”のAという文字によって規定されるべき反社会的行為であり、それ以上でも、それ以下でもないのである。（成田 80）

アーサーとヘスターの不倫を、ピューリタン社会の秩序を破壊する行為としてとらえ、その範囲内で不倫を解釈する。このパラダイムの中で、様々なサブテーマを解釈していくことになる。

次は、『緋文字』におけるテーマの不倫を厳密に問わないパターンである。不倫や罪から離れて、登場人物の生き方の解釈に重点を置くパターンである。荒木は、コラカーチオらの指摘から、アン・ハッチソンがヘスターのモデルであるとし、ふたりがアンティノミアンであると受け止められる点で、同じ性質を有していると論じる。そして、ヘスターの罪ではなくその後の行動に注目する。

コラカーチオはヘスターとハッチソンの足取りが逆方向であることも指摘している。ハッチソンが一七世紀ピューリタン社会から追放されたのは、彼女が預言者的な役割を果たしたからであったことに対し、ヘスターは罪を負った結果その預言者的な役割に進んでいったということである（四六二）。ここでこの方向の違いはきわめて重要である。ヘスターが実際に罪を犯す場面は『緋文字』中には出てこない。よってホーソーンはヘスターの罪そのものの是非を問うているわけではないと考えてもよいだろう。むしろ罪の後のヘスターを問題としているのである。（荒木 53-54）

不倫は物語の構成上用いられているが、罪は設定上のものと解釈し、ヘスターの生き方そのものを重要なテーマとして解釈するパターンである。罪の内容を問わないので、不倫の意味付けも必要なく、登場人物の行動を歴史的事象と結び付けながら解釈できることになる。ホーソーンが描いた登場人物の一面を鮮やかに切り取り提示できる利点がある。

第三は、小説の心理劇を展開するためにピューリタン・モデルを採用したとするパターンである。アーサーとヘスターによる不倫そのものがまず物

語としてのテーマとして採用されたのではなく、ホーソーンが社会対個人といった事柄に対する個人の心理を描くためにピューリタン社会での不倫を採用したという考え方である。

作者 [ホーソーン] は、ピューリタン・モデルをこの小説の心理の枠組みとした。『緋文字』は、歴史的な連続性の中で語られるラブストーリーであると同時に、その逆でもある。『緋文字』は、アメリカの物語を複数の物語のバリエーションで提示している。すなわち公民的英雄主義と個人主義的英雄主義、自治共同体とエマソンの自立、善良なピューリタンと悪しきピューリタンである。(Wright 216)

小説のパラダイムとして、17世紀のピューリタン社会を舞台に設定し、様々なテーマを展開していると解釈するパターンである。不倫と罪を厳密につきとめなくても、2項対立のテーマを探して解釈できる余地がある考え方である。

最後は、ホーソーンが小説の力を派生させるために、物語に「隠された罪」を潜ませたと考えるパターンである。

リチャード・ハーター・フォークル (Richard Harter Fogle) は、『ホーソーンの世界——光と闇』の「アイロニー」という章で、この小説の力の多くが「隠された罪」というテーマに起因することを示唆している。(Wright 215)

「隠された罪」の解釈として、アダムとイブまで遡る原罪は指摘されるところであるが、ドイルはサクソン人が5世紀にイギリスを侵略した史実から読みほどこき、植民地化そのものを、自らの先祖を含むピューリタン (民族としてはアングロサクソン人) の罪とホーソーンが考えていたと論じている (244, 246)。『緋文字』において「隠された罪」がテーマとしてあるという考え方は、不倫そのもの

にとらわれないで、「隠された罪」に対応する描写から様々な解釈が導き出せる可能性を示している。白人によるインディアンに対する迫害の罪も「隠された罪」にあてはめて解釈できるのである。

『緋文字』において、「税関」で矢じりをインディアンの象徴として描いていること、本編でヘスターの胸の緋文字にインディアンが矢を放ったといったエピソードなどから緋文字がインディアンにまつわる物語の予表として機能しているだろうことは前述した。本編において、インディアンの存在と緋文字を結びつけて解釈できるパラダイムは、ピューリタン社会での白人同志以外でも適用できる4つめの「隠された罪」であろう。つまり17世紀以来インディアンの土地と人命を白人たちが奪ってきたという罪である。ピューリタン社会やその後の白人社会では罪と認識されていないインディアン迫害は、元々インディアンが住んでいた土地とインディアンの命を奪うことを神の恩寵として正当化したとしても、神に対しては「隠された罪」としてホーソーンによって認識されることになる。

ホーソーンは、19世紀前半に起きているインディアン問題が神の視点からはどのように見えるかを考えたのであろう。ホーソーンが信じる神は見えざる力を及ぼす神であって、ピューリタンが恣意的に解釈するキリスト教の神というよりも、自然の摂理をとりしきる、プロヴィデンスを支える神のようである。奴隷問題を根本的に解決し得るのは、人為的な奴隷解放令のようなものではなく、神による恩寵 (Divine Providence) (Hawthorne, *Life* 352) であろうというときの神と同じ神を指している。

ドイルに従えば、「隠された罪」を白人の植民地化をめぐるインディアンに対する罪と考えることは十分根拠があるだろう。ただその罪はインディアンに対する罪のみならず、神に対する罪も意識されている。ホーソーンは不倫を単なる個人対社会の問題を語るパラダイムとしたのではなく、む

しる「罪」を共通テーマとしてふたつの社会／文化（白人社会とインディアン社会）の問題を語るためのパラダイムとしたのである。

Ⅲ 『緋文字』におけるインディアンの痕跡

白人のインディアン迫害を「隠された罪」とする視点からインディアンの痕跡を探ってみよう。同じ不倫の罪を犯しながら、ヘスターは罪を認めざるを得ず社会からの非難を受け、アーサーは罪を認めず苦しむといった違いをなぜホーソーンがつけたのということをまず検討する必要がある。というのも、白人のインディアン迫害の罪だけであれば、ふたりの扱いに違いをつけなくてもいいからだ。白人として異なる立場の人間が、その罪に向き合ったとき、どのような態度の違いがあらわれ、それがどう解釈されるかに注目しながら、「隠された罪」となるインディアン迫害の物語を、主な登場人物のインディアン性との関連性を探りながら検討する。

ヘスターが罰せられてから7年間、アーサーは不倫そのものの罪と、罪を認めない不作為の罪を悩み続けるが、ヘスターとパールといっしょに晒し台に上がることで、それらを最後には償う(258)。アーサーがそこまで罪を公に認めたがらないのは、単に牧師という立場で不倫を犯してその罪に関して沈黙していただけでなく、もっと重大な罪に関して黙っていることを暗示しているようである。それは、インディアンをキリスト教に改宗させながら、最後にはインディアンを追放する立場になったジョン・エリオット (John Eliot) との交流がアーサーにあったということからうかがえる。

アーサーはイギリスから来た植民地社会の宗教的指導者である。ドイルは、同時にアーサーがインディアンと土地取引をして植民地化を推進する人間でもあると指摘する (264)。ヨーロッパが南北アメリカなどの地域を植民地化する時代の宣教師には、植民地化を進める地域で先住民を懐柔す

る役割があったということはよく知られていることである。植民地で支配階級に属し、宣教師であるアーサーには先住民を懐柔する役割があったであろうことは十分に考えられる。他方でアーサーはインディアンを武力で排除し、支配する土地を広げていくことに賛成もできない葛藤も抱えている。それは、支配階級の一員でありながら、エリオットのような人間を尊敬し、交流があることから推し測れるのである (223)。というのも、エリオットはただ単にインディアンにキリスト教を布教しただけでなく、同時に彼らを入植者などから守ったからである。

1650年代の一時期、彼 [エリオット] は、伝道活動によって先住民の間に千年王国を確立することもできると考えていた。そして、インディアンのことをよく知り、彼らの問題に共感するようになると、キリスト教徒であろうとなかろうと、土地を奪う入植者や同じインディアンの略奪者からアメリカ先住民を守るための手段として、伝道活動を考えた。(Cogley 4-5)

アーサーがエリオットを尊敬することは、アメリカ先住民を守りたい気持ちが彼にあることを示しているのだろう。さらに、チリングワースにヘスターとの関係を知られていることを知り、先行きが不安で悩んでいるアーサーをヘスターが諭す場面でインディアンを守る思想がほのめかされる。

楽しむべき幸せがある。行うべき良いことがある！ あなたのこの偽りの人生を真の人生と交換しなさい。もしあなたの精神がそのような使命を求めるならば インディアンを教えみちびく伝道師におなりさい！ (198)

と、インディアンへの伝道師になることをヘスターに勧められる。アーサーにとって「真の人生」のひとつがエリオットのようにインディアンを守

ることであるかのようだ。アーサーは植民地支配階級の意図どおりに土地収奪に協力する人間であるが、他方エリオットと交流があることでインディアンを守りたい人間であることを示している。ここにアーサーはヘスターとの不倫とは別の葛藤、インディアン迫害への加担とそれに両立し得ないインディアン保護の考えを持つことが示されているのである。

しかし、エリオットは、インディアンをキリスト教徒 (praying Indian) としてピューリタン植民地＝白人社会に認めさせながらも、フィリップ王戦争が勃発した際には、ボストン近郊のディア島へそうしたインディアンが強制的に移住させられるのを止めることができなかった (Hudson 20)。エリオットの宣教活動の帰結は、従順なキリスト教徒のインディアンを島へ強制的に収容することであった。そのエリオットを尊敬するアーサーが知ることのなかった出来事であるが、もし知ったなら、インディアン迫害に悲壮な思いを持っただろう。エリオットの宗教家としての使命感、善意は疑わないにしても、17世紀に起こっていた従順なインディアンの島への強制移動は、19世紀に起きたインディアン強制移住 (Indian Removal) と同じことの先駆けだったのである。

アーサーがインディアンを武力で排除し、支配する土地を広げていくことに賛成もできない葛藤を経験するのは、ホーソン自身がピューリタン社会に対して二重の意識を抱いていることに由来する。ひとつは、直接の先祖であるホーソン家の祖先を含むピューリタンたちがアメリカ大陸上陸後白人社会を繁栄させたということであり、ホーソン自身の存在も彼ら抜きでは考えられず、彼らを称賛せざるを得ないということである。他方で、ホーソンは、先祖がその社会秩序維持・拡大のために行ったクエーカー教徒迫害、魔女裁判などに対して批判的にならざるを得ない。この批判的な態度は、「税関」において自らを戯作者と卑下し、現在自分があることへの感謝の入りまじ

った感情を表しながらも、先祖の行ってきた残酷な行為に対する慙愧の念を示していることにもうかがえる (9-10)。ホーソンには先祖を称賛する一方で、非難せざるを得ないという葛藤があるのだ。

「税関」にはホーソンの先祖によるインディアン迫害の記述はないのだが、先祖のウィリアム・ホーソンはインディアン討伐のフィリップ王戦争に参加しており、魔女裁判の判事であったジョン・ホーソンもインディアンに対する戦争で軍隊を指揮している (Gale 215, 301)。ウィリアムとジョンの存在をほのめかすことで、クエーカー教徒、魔女裁判の被害者のみならず、インディアンも先祖の迫害の被害者であったことが暗示され、その子孫としてホーソンが罪の意識を持っていることがほのめかされている。つまりホーソンは、ピューリタン社会からの恩恵にあずかりながらも、他方でピューリタンによるインディアン迫害を罪として認めざるを得ない自身の姿をアーサーに投影させているのだ。

ティモシー・パウエル (Timothy Powell) は、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) は1846年に出版された『タイピー』(Typee)において白人社会批判を弱めるような編集者の検閲を経験したので、『白鯨』(Moby Dick) では、二重構造の語りで支配的白人社会を非難し、編集者の検閲を免れたと論じている (Powell 160)。同じ頃、特にインディアンに関する言説が「明白な運命」によって封じ込められるような社会環境¹⁾では、白人がインディアンに対して行ったことへの直接的な批判が困難なので、「税関」においてホーソンは、先祖がインディアンに対して行った所業をほのめかすにとどめたと考えるのが妥当だろう。アーサーの煮え切らない態度は、19世紀に生きたホーソンのインディアン問題に対する葛藤のあらわれでもあった。

ヘスターとパールのインディアン性に関しては、すでに指摘したとおり、バーコピッチがヘスターの革新性にインディアンの野生を見出し、パールの

にインディアンイメージを見出している(40)。まずヘスターのインディアン性については、白人女性がインディアンのように自由で独立した性質を示すという点と、同時にピューリタン社会の白人女性に対する抑圧といったインディアンと共通した迫害を受けるという点が挙げられるだろう。前者の点についてドイルは、ホーソーンはヘスターを白人社会の中での反逆の開祖とし、その自由さはインディアンから吸収し、昇華したものであると論じている(Doyle 262-63)。ヘスターの描かれ方から強く印象付けられる点である。後者の点については、ホーソーンが白人女性の苦境を表わすためにヘスターに緋文字をつけさせ、晒し台に立たせ、町はずれに住まわせるといったインディアンの境遇を想起させるような疎外状態に置いたのであるが、一時的な逆境でありヘスターはこれらを克服している。インディアンと共通な境遇であったとしても、白人女性は克服に展望が開かれており、インディアンとは違う点が示されている。ヘスターのインディアン性に関しては、ヘスターをめぐるホーソーンに関心がインディアン迫害よりも白人女性の苦難にむかっているものであり、ヘスターの描かれ方はインディアン性を示すとしても白人性に重点が置かれていると考えて差し支えないだろう。次に7歳になったパールの描写から、パールのインディアン性を探ってみる。

ウィルソン牧師(the Reverend Mr. Wilson)が初めてパールと会ったとき、彼女は緋色の服をまわっており、自らをパールと名のる。これに対してウィルソン牧師は、“Pearl? — Ruby, rather — or Coral! — or Red Rose, at the very least, judging from thy hue!”と言う(110)。ヘスターの子供であり、罪の証拠でもあることの表現として緋色であったのだろうが、同時にインディアンを指し示す“red man”と同じ“Red”を用いることで、パールのインディアン性を示している。町はずれに母親とふたりで暮らすパールは、ピューリタンの子供たちと仲よくなることもなく、むしろ敵対す

るかの関係があり、ピューリタンの子供たちにいじめられたとき、「不明の言語」“some unknown tongue”で叫んだりする(94)。英語以外の言語としては、西洋の言葉であれば不明と表現されないだろうから、インディアンの言語が暗示されていると考えられる。また、ピューリタン植民地の設立者アイザック・ジョンソン(Isaac Johnson)の墓の上でダンスすることで、墓場に埋葬されている植民地の創設者らを非難するような行動をとっていることから、パールがピューリタン社会に敵対することを示している(133-34)。パールが身につけた赤系統の色、意味不明の言語、墓場でのピューリタンに反抗するような行動から、彼女はピューリタン社会に反抗するインディアン性を帯びていると解釈できる。そして、彼女のインディアン性は、物語における重要な場面に新しい解釈をもたらすことになる。

パールのインディアン性は、森の中では拒否したが、晒し台と一緒に立つ場面でのアーサーに対するキスで発揮される。

まず、晒し台の上でパールがアーサーにキスをしたときに「呪縛」(spell)は解かれ、ヘスターとアーサーに対する苦悩の使者としての役割が終わったことが告げられる(256)。このことは、アーサーがパールの父親であることと不倫の罪を認めることでパールがアーサーを許したとひとまず解釈される。ではインディアン性を示すパールのキスはどう解釈できるのだろうか。アーサーとヘスターが「隠された罪」としてインディアン迫害の罪を犯したと考えると、インディアン性を示すパールのキスは、それまでその罪を認めてこなかったアーサーを許すことになる。アーサーが抱えていたインディアンを迫害して土地を奪っていることへの罪を晒し台という罪びとをさらす舞台で認めることが、贖罪となったのだろう。

また、インディアン性を示すパールによってアーサーが許されることで、ホーソーンが「税関」において解かれることを望んだ先祖が引き起こし

た「呪い」(any curse) (10) も解かれることになる。パールのキスによってホーソン家の贖罪、ひいては白人の贖罪が認められたと解釈される。ただ、白人によるインディアン迫害の本格的な贖罪を考えるとすれば、迫害行為に対する謝罪のみならず奪った土地の返還まで及ばなければならないであろう。ホーソンは『七破風の屋敷』において、先祖のピューリタン支配階級のひとりであるピンチョン大佐 (Colonel Pyncheon) がマシュー・モール (Matthew Maule) から収奪した土地に関し、モールの処刑から約200年後に、子孫のクリフォード・ピンチョン (Clifford Pyncheon) のおじが見解を述べる場面で土地返還の思想を明らかにする。

その不当な手段で獲得された略奪物——黒い血のしみが深くそのなかに染みこみ、いまでもなお良心のある人間の鼻孔には、その血の匂いが漂ってくる財産——を所有しているということになると、ここに、もはやすでに遅きに失するとは言うものの、その財産をモールの子孫に返却するのが緊急の義務ではないかという問題が、頭をもたげてきた。(23)

モール家がインディアン性を帯びているという解釈にたてば、おじは所有する財産を19世紀のインディアンに返すべきであると考えているのである。この略奪したものを返還する思想はインディアンに対する贖罪と考えられるが、『緋文字』においてはまず罪を認めることで許しを得られたと考えたのであろう。そして許しの後には、インディアンへの伝道師になるといったインディアン救済の道も考えたのだ。パールのキスによる許しは贖罪の第一歩であったと解釈される。

また、パールのインディアン性は、ヘスターが新天地にアーサーと旅立つ決心をして緋文字をはずそうとしたときにも発揮されることになる。パールは緋文字を外したヘスターの胸を指で指し続

ける (210)。母親がアーサーと会ってそれまでの社会的に抑圧された存在から女性性を取り戻し、親子三人でこの社会から脱出し幸せに暮らしたいと思ったときに、母の幸せを感じ取っていただろうこのようなパールの行動は、不可解である。パーコビッチはパールにピューリタン社会の同調圧力をかける役目を見出し、緋文字をつけ直すヘスターの行為をピューリタン社会の枠に不本意ながらも納まるヘスターの諦念とみなしている (Bercovitch 12)。しかし、パールのインディアン性を考慮すると別の解釈が可能になってくる。元々イギリスから植民地に来て、アーサーと同じ罪を犯すヘスターは、インディアン迫害の事実を知ってその罪を認めざるを得ない、インディアン問題を認識していた人々の代表であると考えられる。ヘスターは作品中でマリア (Divine Maternity)、修道女 (Sister of Mercy)、尼 (nun) に例えられており、カトリック系の慈悲でもって解決を図る姿が描かれる (56, 161, 163)。特にヘスターを尼に例えていることは、17世紀アメリカのフランス植民地でのカソリック尼僧がインディアン救済を宗教活動の一環として行っていたことから (Ciment 60)、インディアンに対するヘスターの共感的な立場を示している。そして、そのことは、ヘスターが白人のインディアン迫害の罪を認めていることを暗示しているのである。ヘスターの胸の緋文字はその罪を認めた象徴なのである。そしてインディアンの救済活動をしている姿は、共同体の人々を助けるヘスターと重なるのだ。しかし、インディアン性を帯びたパールが緋文字を外すヘスターを非難する行動は、ヘスターの心変わりを許さない意図であると解釈できる。それはインディアンに対する罪を認めた印を取り外すことは許されないということであろう。

ここまでヘスターは、インディアンに対する罪を認め、緋文字を胸につけることで贖罪を表現していると解してきた。しかし、ヘスターは必ずしも自発的にその罪を認めたわけではない。ヘスタ

ーは隠しきれないパールの存在から不倫の罪を認めざるを得なかったのである。ときとしてアーサーとの関係は神聖なもの (consecration) とピューリタン社会に対して抗弁したりする。ヘスターが不倫の罪を認めているかどうかに関しては、最終的にはボストン帰還後に自分の意思で緋文字を身につけ、ピューリタン社会に対してではなく、神に対してその罪を認める行動をとったと解釈するのが妥当である。ヘスターは、同胞が直接犯したインディアンに対する罪を同じ白人として自ら認めたわけではなく、既成事実を否定できなかったため、罪と認めざるを得なかったということである。ヘスターはアーサーとの不倫行為を神聖と言う。この神意に沿うかのような言葉遣いは、ニューイングランドの初期入植者が、インディアンが疫病で死に絶えた土地を見たときに、神の恩寵 (province) と呼んでいたことと同種のものを見ることができよう (Drake 103)。ヘスターには植民地でインディアンを駆逐することにより土地を確保し生活しているという現実に対して揺れる思いがあったのだ。インディアンに対する罪は認めるが、植民地で生活する現実も認めざるを得ないということである。インディアンに対する救済活動は根本的な解決にはつながらなかったのだが、インディアン迫害の罪を許される理由にはなつたのであろう。

ヘスターをカソリックで描写する意味合いを19世紀の文脈で探っていくと、マーガレット・フラー (Margaret Fuller) とつながる。ドイルは自由な思想を持つ、進歩的な19世紀の女性の姿がヘスターから読みとれると論じているが (265)、その進歩的な女性のひとりとして、インディアンに共感してピューリタンを批判し、カソリックをほめたたえたフラーが挙げられるだろう。トーマス・ミッチェル (Thomas Mitchell) は、フランシス・E・カーズ (Francis E. Kearns)、ラリー・J・レノルズ (Larry J. Reynolds) がフラーはヘスターのモデルであると論じていることを述べたうえで、

フラーは、ホーソーンへのヘスターに対する概念そのものの中心にいたということを論じている (Mitchell 132-33)。

『五大湖の夏』 (*Summer on the Lakes*) においてフラーは、17世紀アメリカ植民地におけるピューリタンによるインディアン政策とカナダにおけるフレンチカソリックによる政策を比較し、フレンチカソリックは少なくともインディアンに害を及ぼさなかったのだが、プロテスタントの人々は自分たちのドグマに凝り固まり、インディアンに害を及ぼしたと主張する。その結果、アメリカのインディアンの窮状はアメリカ政府と人々の罪である、と父権的支配者を批判する (184)。フラーは、白人による北米大陸のインディアンの迫害について批判的であった。だがそのフラーでさえ、インディアンは消滅する運命にあると考え、白人との異人種間混交の可能性も否定し、インディアンに対する共感を表面的に示しただけのようである (194-95, 233)。ヘスターはカソリックの慈愛あふれる女性像と重ねられているのだが、それでもアーサーとの行為を「神聖」さを持つと言い、インディアンに対する罪を素直に認めているわけではない。ホーソーンにとっては、フラーのような19世紀前半の女性解放運動家はインディアンに対する罪を認めたくないように見えたのであろう。女性運動家たちはインディアン問題に自分たちの立場を重ね、黒人奴隷解放と併せてインディアン問題解決の請願をした (Strand 45)。しかし、インディアン強制移住法に反対していた北部白人は、法案成立後はインディアンに対する政治的関心を失っていき、1838年の「涙の道」をもってインディアン問題は一応の終結を迎えたと言われている (Zinn 138, 142, 146-48)。以後彼らの関心は黒人奴隷解放問題へと移行した。ヘスターが不倫を「神聖」と呼ぶ姿は、インディアンには共感的でピューリタン社会を批判してインディアン救済を唱えるが、インディアンは消滅する人種であると考え、インディアン問題は解決できないとするフラーを

投影したものであろう。ホーソーンはフラーの行動を支持しつつもインディアン問題解決を放棄する彼女を批判したのだ。

ホーソーンは、アメリカに上陸し白人アメリカ社会を成立させるピューリタンに対しては尊敬の念を抱きつつも、他方で滅亡させられていったインディアンに対しては罪の意識があった。その自身の考えを、違う立場のふたりの人間で表現した。アーサーはイギリスから移住し植民地のピューリタン社会には肯定的だが、他方でインディアンに対して行った侵略行為に対して葛藤があり、インディアンに対する罪を最初は認めたがらないが最後にはこれを自供して死んでいく。ヘスターはピューリタン社会に批判的でピューリタンがインディアンにしたことを罪と認めるが、ピューリタン社会からは逸脱することをしない。ピューリタン社会には、ただひとりヘスターがヨーロッパから帰ってきて、インディアン迫害の罪の証である緋文字を胸に着け残ることになる。19世紀のニューイングランドには、インディアン迫害の罪を認めることでインディアンとの共生も図ることのできるヘスターのような自由で独立した人格の人間がふさわしいかのようなのである。

ホーソーンは、200年前に起きた白人の侵略は現実として受容し、19世紀でまだ残された土地でのインディアンとの共存を望んだのだ。ホーソーンは、アーサーを死に追いやることでインディアンを迫害する白人を否定し、パールに代表されるインディアンが他の土地で幸せに暮らす姿を描き、19世紀のインディアン問題を解決しようとしたのだ。

おわりに

『緋文字』本編の冒頭で、ユートピアを求めてきた植民地の創設者たちはまず墓と刑務所の土地を確保することが必要だったとホーソーンは述べている(47)。斎藤忠利は、「墓地と刑務所と合わせて、両者の存在が人間にとって不可欠なものである人間は——その本性からして、死と罪とを免れ

得ない——とする、ホーソーンの手紙は、強烈な印象を読者に与えずにはおかない」と指摘する(169-70)。それに加えて、ある民族が他の民族を駆逐して自らのユートピアを築くときには、人の住んでいない処女地を開拓していくユートピアとは違い、戦争で亡くなる人間の墓地と相手民族を含む反社会的な人間を排除し秩序を守るための監獄が必要となることを、ホーソーンは認識していたのだ。緋文字Aは、ピューリタンの武力の象徴である鎧(Armour)(105, 106, 114, 236)であったのだろう。『緋文字』は17世紀以降19世紀にわたって白人がインディアンに対して犯した罪に関する物語である。

ホーソーンは、19世紀に生きるピューリタンの末裔として、17世紀から起きているインディアン迫害を民族の侵略として捉え、当時のニューイングランドの白人支配を認めざるを得なかった。その反面、その支配にはインディアンの犠牲があることを認識し、罪の意識を持っていた。しかし、1838年の「涙の道」以後インディアン問題に対する人々の関心が薄くなり、逆に「明白な運命」でインディアンの土地を奪って西進が正当化される時代では、インディアン問題を真正面から取り上げて物語にすることは困難であった。白人がアメリカを支配する現状を認めはするが、インディアン迫害の罪を認めそれ以上のインディアン迫害をすべきでないという言説は、不倫のパラダイムを借りて「隠された罪」として語るしかなかったのだ。ホーソーンは、インディアン殲滅の罪を認めたアーサーを亡くならせている。ホーソーンは、ヘスターがボストンに帰還後、罪を認めるのでなければ必要のない緋文字を彼女に付けさせ人々のよき相談者とならせ、パールを他の土地で平和に暮らさせている。インディアンに許しを請い、白人によるインディアン迫害を止めさせ、インディアンが幸せに暮らせる土地を保証するといった和解思想を含む、インディアン擁護の物語を提示することが、ホーソーンのエッセイのインディアン問題への回

答であった。

注

- 1) 1812年の米英戦争でインディアンをほぼ制圧したアメリカ政府は、自国が神に守られているものとして白人至上主義を推し進めた。19世紀前半のアメリカでインディアン迫害に異議を申し立てるのは困難な状況であった。「1815年以降、アメリカは民主主義を広めるのではなく、白人至上主義のイデオロギーを輸出した。徐々にメキシコ、フィリピン、カリブ海諸国、そして間接的に他国への覇権を求めていった。西部開拓時代のアメリカの行動に衝撃を受けたと言っていたヨーロッパ諸国は、いつの間にかアメリカを真似るようになった」(Loewen 124)。

参考文献

- Bercovitch, Sacvan. *The Office of the Scarlet Letter*. Johns Hopkins UP, 1991.
- Bergland, Renée L. “Haunted Hawthorne.” *The National Uncanny*. UP of New England, 2000, pp.145–58.
- Ciment, James, editor. *Colonial America: An Encyclopedia of Social, Political, Cultural, and Economic History*. vol.1. M.E. Sharpe, 2006.
- Cogley, Richard W. *John Eliot’s Mission to the Indians before King Philip’s War*. Harvard UP, 1999.
- Colacurcio, Michael J. *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne’s Early Tales*. Harvard UP, 1984.
- Drake, Samuel G. *History of the Early Discovery of America and Landing of the Pilgrims with a Biography of the North American Indians*. Higgins and Bradley, 1854.
- Doyle, Laura. “‘A’ for Atlantic: The Colonizing Force of Hawthorne’s *The Scarlet Letter*.” *American Literature*, vol. 79, no. 2, 2007, pp.243–73.
- Elbert, Monka M. “Native American Presence.” *Nathaniel Hawthorne in Context*, edited by Monica M. Elbert, Cambridge UP, 2018, pp.25–48.
- Fuller, Margaret. *Summer on the Lakes, in 1843*. Charles S. Francis, 1844.
- Gale, Robert L. *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia*. Greenwood Press, 1991.
- Godbeer, Richard. *Sexual Revolution in Early America*. Johns Hopkins UP, 2004.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1962–1997.
- . *Mosses from An Old Manse*. 1846. vol. 10 of *Centenary Edition* by Hawthorne.
- . *The Life of Franklin Pierce*. 1852. vol. 23 of *Centenary Edition* by Hawthorne.
- . *The House of the Seven Gables*. 1851. vol. 2 of *Centenary Edition* by Hawthorne.
- . *The Scarlet Letter*. 1850. vol. 1 of *Centenary Edition* by Hawthorne.
- Hudson, Alfred Sereno. *The History of Concord, Massachusetts*. 1904. Jazzybee Verlag, 2018.
- Loewen, James W. *Lies My Teacher Told Me: Everything Your American History Textbook Got Wrong*. The New Press, 1995.
- McManus, Edgar J. *Law and Liberty in Early New England Criminal Justice and Due Process, 1620–1692*. U of Massachusetts P, 1993.
- Mitchell, Thomas R. *Hawthorne’s Fuller Mystery*. U of Massachusetts P, 1998.
- Ostrander, Kathleen. *Remembering the Kennebunks American Chronicles*. The History Press, 2009.
- Powell, Timothy B. *Ruthless Democracy: A multicultural Interpretation of the American Renaissance*. Princeton UP, 2000.
- Strand, Amy Dunham. “Hope Leslie, Women’s Petitions, and Political Discourse in Jacksonian America.” *Language, Gender, and Citizenship in American Literature, 1789–1919*. Routledge, 2009, pp.16–61.
- Wright, Sarah Bird. *Critical Companion to Nathaniel Hawthorne: A Literary Reference to His Life and Work*. Facts On File, 2007.
- Zinn, Howard. *A people’s History of the United States*. 1980, Harper perenial, 2005.
- 荒木純子「女性らしさの歴史化—アン・ハッチソンからヘスター・プリンへ」、斎藤忠利編『緋文字の断層』開文社出版、2001年、53–70頁。
- 斎藤忠利「『緋文字』序論：ナサニエル・ホーソーン研究(三)」、『一橋大学研究年報 人文科学研究』、7号、1965年、169–195頁。
- 成田雅彦「『緋文字』と『父親』の誕生」、斎藤忠利編『緋文字の断層』開文社出版、2001年、71–90頁。